2020/7/2　watanabe

第９章　菩提心を摂受する　Cultivation of Bodhicitta

目次より

第８章　帰依して律儀を受ける

第９章　菩提心を摂受する

第 10 章　誓願の発心

英訳の目次では、第８章の前に以下の序文がありました。

Antidote to Not Knowing the Method of Practice for Achieving Buddhahood

Introduction to the Antidote to Not Knowing the Method of Practice

Now this will explain the Dharma of cultivating the mind toward supreme enlightenment as the antidote to not knowing the method of the practice for achieving Buddhahood.

The summary:

Foundation, essence, classification, Objectives, cause, from whom you receive it, Method, beneficial effects, disadvantages of losing it, The cause of losing it, method of repairing, and training-

These twelve comprise the cultivation of bodhicitta.

（下線の試訳）

菩提成就への修行方法の無知の対治。

修行方法の無知に対する対治の序説。

菩提心の摂受は、これら 12 の構成である。

12 の構成とは、英訳の目次では Chapter8～Chapter10,11 の

ⅠからⅫを指しています。

Chapter８　Refuge and Precepts

Ⅰ．Foundation

Chapter９　Cultivation of Bodhicitta

Ⅱ．Essence

Ⅲ　Classification

Ⅳ　Objectives

Ⅴ. Cause

Ⅵ.From Whom You Receive It

Ⅶ.Method(Ceremony)

Ⅷ.Beneficial Effects

Ⅸ.Disadvantages of Losing It

Ⅹ.The Cause of Losing It

１番目は、第８章の

Ⅰ.Foundation　帰依

土台・出発点

２番目は、第９章の

Ⅱ.Essence.

３番目は、第９章の

Ⅲ.Classification

本日は

ここから。

XI.The Method of Repairing

Chapter10　Training in Aspiration Bodhicitta

XII.Training

A. Training in Aspiration Bodhicitta

Chapter11　Training　in Action Bodhicitta

B.Training in Action Bodhicitta

１２番目は、
第１０章と第１１章の
XII.Training

解脱の宝飾（ｐ１５８～ｐ１６０－１０行目）

（本文）

(V109)

発心の〔自体〕

正覚に発心することの自体は、他者のために正等覚を欲することです。

『現観荘厳論』（訳註１）に「発心は利他のために正等覚を欲すること。」と説かれています。

正覚に発心すること＝Cultivation of bodhicitta　　（直訳：菩提心の修錬）

正覚　：①正しい仏の悟り。②悟りを開いた人。仏のこと。

発心：①菩提心をおこすこと。発菩提心とも。②思い立ってなにかを始めようと思うこと。

Bodhicitta：菩提心とは（ぼだいしん、梵 bodhi-citta）とは、**さとり（菩提、bodhi）を求める心（citta）のこと。**　　（wikipedia より）

自体＝Essence　㊀1.本質、真髄、根本的要素　　（第五版　新英和中辞典　研究社より）

：自分の身体。みずからの身体。　　（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

【帰依と発心の祈り】

ブッダとダルマと聖なるサンガとに　菩提を得るまで帰依したてまつる

わが積みたる布施など福徳で　衆生のためにブッダになることを

『ガルチェン・リンポチェ法話集１修行の道』ｐ３～ｐ４より

『三十七の菩薩行』に「円満諸仏は利他より生まれたり」と説かれています。利他の心で我執を打ち壊さなくてはなりません。それを長い時間かけて修習していきます。利他心は氷を溶かす熱です。我執が減ると利他心が増します。利他心が増すと智恵が増します。他を利益しようと思えば、たとえば外のレベルでも科学が発展します。世界や国の人を助けたいと思えば、外のレベルの智恵が増し、人を幸せにする方法が見つかります。まず理解しなければならないことは、利他心は自らを最も利益し、我執は自らを最も害するということです。一時的に少し助けになっても、究極的には、我執は必ず害になります。我執は氷の塊で、すべての智恵を失わせるからです。

（本文）

発心の区別

最上の正覚に発心することには、区別するなら、三つ。〔すなわち、〕

1）譬喩を通じた区別と、

2）境界を通じた区別と、

3）自相（定義）を通じた区別です。

今日はここまで勉強します

譬喻　simile　名　直喩、明喩　　（第五版　新英和中辞典　研究社より）

：①物事の説明に他の物事を借りて表現すること。（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

（本文）

譬喩を通じた区別

そのうち、第一〔：譬喩を通じた区別〕は、

菩提心そのものを、凡夫から仏の地の間に区別することを、譬喩により説くことは、聖者マイトレーヤが説かれています。

すなわち、『現観荘厳論』（訳註 2）に

「それはまた地、金、月、火、倉庫、宝の鉱脈、（H50b）海、金剛、山、薬草、友、如意珠、日、歌、王、蔵、大道、乗物、泉の水、歓声、河、雲〔の喩え〕によって二十二種類である。」と説かれています。

これら二十二の譬喩は、利を欲することから法身までです。

それはまた〔資糧道・加行道・見道・修道・究竟道の〕五道に適用したなら、

『**現観荘厳論**』（梵: Abhisamaya-alaṅkāra）とは、

大乗仏教瑜伽行唯識派の祖であるマイトレーヤ（弥勒）の著作とされる『般若経』の綱要についての論書。チベット仏教における「弥勒五論」の一著。　　（Wikipedia より）

利を欲することから法身まで＝from sincere aspiration to realization of the Dharmakaya

（直訳）：うそ偽りのない熱望から法身の実現まで

資糧：①仏道修行のかてとなる善根功徳。②悟りの智慧の助けとなる仏道修行。

加行：①一般に、正規の修行に対する準備的に行う行のこと。密教や浄土、禅などの諸宗では、灌頂、受戒、付法等に際し、その前に準備的に行う修行をいう。②修行に励むこと。また、その修行。

見道：①煩悩のない智慧（無漏智）をおこして仏教の真理である四諦を観察し明らかにする位（段階）。この位ではじめて聖者の仲間に入り、それ以前は凡夫の位である。

修道（しゅどう）：①三道（見・修・無学）の第二の位。見道で四諦の理を悟る無漏智を生じた後、さらに

具体的な事柄のうえで、繰り返し修錬をつむ位をいう。②仏道を修めること。仏道を修行すること。

究竟道：究極の目的に到達する最高の道のこと。

五道＝the five paths　　衆生が善悪の行為を因として赴く五種類の世界。

（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

ここから、**菩提心**そのものを、凡夫から仏の地の間に区別することを譬喩。

（本文）

①〔意〕欲をもつのは**地**と似ている。〔すなわち〕白の一切法（V110）の所依の事物になるのです。
②思惟をもつものは**金**と似ている。〔すなわち〕正覚まで変わらないのです。
③増上意楽（勝れた思惟）をもつものは、初めての**月**と似ている。〔すなわち〕あらゆる善の法が増長することになるのです。
その三つは、**資糧道**の小と中と大の初業者の地により包摂されているのです。

〔意〕欲をもつの＝Earnest desire　to achieve enlightenment

直訳：悟りを達成するための本気の欲望

思惟をもつもの＝A general intention to achieve enlightenment

直訳：悟りを達成するための一般的な努力。

増上意楽をもつもの＝Possessing altruistic thought　　直訳：利他的な考えを持っているもの

月＝the waxing moon　　直訳：満ちていく月

資料道＝the path of accumulation　　直訳：蓄積の道

資糧：①仏道修行のかてとなる善根功徳。②悟りの智慧の助けとなる仏道修行。

初業者の地＝the ordinary level

『三十七の菩薩行』より

暇満の舟なる人身得たからは　自他を輪廻の海より救うため
　昼間も夜も心を散らさずに　聞思修する仏子菩薩行（1）
親しむならば罪過が尽きてゆき　新月のごと功徳が増えてゆく
　正しき友よりわが身よりなお　大切にする仏子菩薩行（6）

『ガルチェン・リンポチェ法話集１修行の道』 p 4

釈尊は声聞乗、菩薩乗、金剛乗の三つの道を説かれました。一切の教えの本質は慈愛を育むことです。みな心に慈愛がありますが、私たちの慈愛はとても限られています。心を有するものはみな、たとえ動物でも慈愛がありますが、それを成長させなくてはなりません。それが法の目的です。法とは、菩提心を「まだ生ぜずば生ずべし　生じて滅ずることはなく　ますます増大」させるための方便です。

（本文）

④加行を持ったものは、**火**と似ている。〔すなわち、一切智性・道智性・一切相智性の〕三つの一切智性を障礙する薪を燃やすのです。それは**加行道**により包摂されています。

加行を持ったもの＝Possessing earnest application

直訳：本気の志願をもつもの

一切智性＝forms of omniscience　　直訳：全知性、博識性

一切智：①すべてを知っている人。仏のこと。②一切を知りつくす仏の智慧。③仏の悟りをいう。④一切を知る最上完全な智慧。

道智；四諦のうちの道諦の理を悟る智をいう。十智の一つ。

道諦：四諦の第四。苦しみのない涅槃の境地に達するために正しい修行を行わねばならないということ。

：理想世界の原因理由…因

一切相智：すべての現象（事物）を空であると知る智慧。

障礙する薪を燃やす＝burns away the fuel for the obscurations

直訳：もうろうたる薪を焼き払う

障礙：障害。さまたげ。とくに、仏の悟りをうるための仏道修行の邪魔をするさわり。

また、悪魔、怨霊などによるさまたげ。

加行道＝the path of application　　直訳：勤勉なる道

加行：①一般に、正規の修行に対する準備的に行う行のこと。密教や浄土、禅などの諸宗では、灌頂、受戒、付法等に際し、その前に準備的に行う修行をいう。②修行に励むこと。また、その修行。

（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

『ガルチェン・リンポチェ法話集１修行の道』ｐ４より

生じていない菩提心を生じさせるための方便は、「心を転ずる四つの加行」を瞑想することです。まず、**苦に気づく**必要があります。二つ目の**生じた菩提心を減じさせないための方便は、六波羅蜜を修習すること**です。そして三つ目の、**ますます増大させるための方便は、金剛乗（密教）の修行**です。金剛乗では、私たちの心に本来備わっている徳を学びます。それはつまり、心は不二で虚空のようだということです。この真の意味を金剛乗で悟ります。密教の修行を通じて無量になるまで慈愛を増大させるなら、自他が不二であることを理解します。慈無量心が生じるなら、我執はしだいに減じ、心は自ずと虚空のようになるのです。そのときに密教の真の意味が理解できます。

（本文）

⑤**施の波羅蜜**を具えたものは、大きな**倉庫**と似ている。〔すなわち〕一切有情を満足させるのです。
⑥**戒**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**宝の鉱脈**と似ている。〔すなわち〕功徳の宝の依処の事物になるのです。
⑦**忍**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**大海**と似ている。〔すなわち〕あらゆる欲しないものごとが降りかかってきたことにより、動揺しないのです。
⑧**精進**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**金剛**と似ている。〔すなわち〕壊れないことにより堅固です。
⑨**静慮**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**山の王**〔・スメール山〕と似ている。〔すなわち〕所縁の散乱により動じないのです。
⑩**智恵**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**薬草**と似ている。〔すなわち〕煩悩障と所知障の病を止滅させるのです。
⑪**方便**〔の波羅蜜〕を（H51a）具えたものは、善友〔・善知識〕と似ている。〔すなわち〕あらゆる状況において有情の利益を放棄しないのです。
⑫**誓願**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**如意宝珠**と似ている。〔すなわち〕誓願したとおりの果が成就するのです。
⑬**力**〔の波羅蜜〕を具えたものは、**太陽**と似ている。〔すなわち〕教化対象者を円熟させるのです。
⑭**智慧の波羅蜜**〔を具えたもの〕は、**法の歌声**と似ている。〔すなわち〕教化対象者に意欲させる法を説くのです。

施波羅蜜：菩薩の行である六波羅蜜・十波羅蜜の一つ。菩薩の完全な布施の修行。

戒：悪を止め、善を修する、行いを慎むための戒めをいう。その戒めとして、あやまちを防止するための規則が説かれ、その規則を守ると誓うことによって、仏教徒の一員になるものとする。ただし規則の内容は在家五戒。出家に沙弥の十戒、比丘の具足戒などの違いがある。

戒〔の波羅蜜〕：仏の悟りを開くための持戒の実践修行。

持戒：戒律を守って犯さないこと。きめられた戒めをよく守ること。

忍〔の波羅蜜〕：種々の迫害や侮辱を耐え忍んで心を動かさないこと。

精進〔の波羅蜜〕：ひたすら努めはげんで、仏道修行を全うすること。

静慮〔の波羅蜜〕：散乱動揺する心を静め、一点に集中して、悟りを得ることに努めること。

智恵〔の波羅蜜〕　Possessing discriminating wisdom　（直訳：識別力のある知恵。）

：涅槃の彼岸にいたるために、菩薩が修行する六種もしくは十種の行のうちの一つ。真理を認識する悟りの智慧。

煩悩障：悟りに至る障礙をする煩悩。また煩悩という悟りの障碍。

所知障：誤った執着によって、正しく知られねばならないはずの真理を覆い隠して、悟りの

妨げとなる無知迷妄をいう。

方便：《梵 upaya の訳》①真実の教えに導くためのてだてとして仮に用いる手段としての教え。世の人を救い、悟りに導くために一時、手段として用いる方法。

方便波羅蜜：十波羅蜜の一つ。衆生を救うために巧みな手段を講じて悟りに至らせること。その修行的な努力。

善知識：①善法、正法を説いて人を仏道のはいらせる人。外から護る外護、行動を共に同行、教えを導く教導の三種を数える。真宗では法主を、禅宗では師僧を尊んでいうことがある。また菩薩をさすことがある。②人を仏道に導く機縁や機会となるもの。

誓願：①誓いを立てること。②仏・菩薩が衆生救済の誓いを立てること。また、その誓い。阿弥陀仏の四十八願はその例。

四十八願…阿弥陀仏が法蔵比丘と称して修行していた時に立てた四十八の誓願をいう。『無量寿経』巻上に、仏となった暁には、かならず願いどおりにならなければ、仏にはならないと誓って、その願を成就して仏となったことが記され、願の一々について細説する。

如意宝珠…一切の願いが意のごとくかなという不思議な宝の玉の意で、衆生の願いを成就させる仏の徳を象徴するもの。

力（りき）…①能力。またすぐれたはたらきをもたらす力。②仏力。仏の力

（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

五力…五根が能力であったのに対して、実際にはたらく具体的となったものが力である。

（中略）五根よりも進展した修道の立場にあるものである。（仏教要語の基礎知識より）

智慧波羅蜜　Possessing primordial wisdom　（直訳：原初からの知恵）

智恵波羅蜜と智慧波羅蜜について

仏教要語の基礎知識 p 229～231（智慧の作用）より

智慧はこれを有分別智（savikalpa-jnana）と無分別智（nirvikalpa-jnana）の二つとすることができる。有分別智とはその対象を意識し、対象と対立している場合を指し、無分別智とはその智慧が対象を意識することなく、対象と一体になっている場合がそれであり、最高の悟りの智慧を指す。「色即是空」と観ずる空の智慧がそれである。

仏教の理想は、前の第四章の「諸法無我」における無我や空の説明でのべたように、まず一切法が無我であり無自性である道理を理論的に正しく知り、次に無我無自性の道理に従って、無所得無執着の態度から無礙自在の活動ができるようになることである。力をも心をも用いず、無礙得自在にして、自然に法にかなった自然法爾の智慧が無分別智である。これは最高の悟りの智慧を指すことはいうまでもない。これを大智という。般若波羅蜜といわれるのはこれである。

ところが、この最高の無分別智を得た仏や菩薩はそれに止まることをしない。その智慧をもって衆生救済の慈悲活動に転ずるのである。この時にはその智慧は対象としての衆生を意識する有分別智となる。しかしこの智慧は最高の無分別智を得た後に起こるものであるから、以前の有分別智と区別して有分別後得智という。

六波羅蜜でいえば、般若波羅蜜以前の布施・忍辱・精進・禅定の五波羅蜜が有分別後得智の作用となるのである。これを方便という。故に六波羅蜜は方便と般若の二つとなり、

方便は有分別後得智による慈悲活動であり、般若は無分別智による智慧活動である。

前者は下化衆生の大悲であり、後者は上求菩薩の大智ということができる。このように大智と大悲の智慧活動を具備することが仏教の理想目的である。

有分別智：分別心をもって対象を思い浮かべて知る智をいう。

有分別：無分別の対。区別を明らかに示す認識。

後得：さとった後に得られた、の意。

後得智：根本智より後に得られる智。衆生済度にはたらく智慧。

無分別智：主観・客観の相を離れて、平等にはたらく真実の智慧。識別、弁別する以前の智慧。

（佛教語大辞典　　中村　元著）

（本文）

そのように十〔の波羅蜜を具えたもの〕は順次に、〔第一〕歓喜〔地、第二離垢地、第三発光地、第四焔慧地、第五難勝地、第六現前地、第七遠行地、第八不動地、第九善慧地、第十法雲地〕など〔、勝義の菩薩の〕十地により包摂されています。見道と修道を行境としたものです。

見道＝the path of insight

：①煩悩のない智慧（無漏智）をおこして仏教の真理である四諦を観察し明らかにする位（段階）。この位ではじめて聖者の仲間に入り、それ以前は凡夫の位である。

修道＝the path of meditation

（しゅどう）：①三道（見・修・無学）の第二の位。見道で四諦の理を悟る無漏智を生じた後、さらに具体的な事柄のうえで、繰り返し修錬をつむ位をいう。②仏道を修めること。仏道を修行すること

三道：仏道修行の三段階である、見道、修道、無学道をいう。

無学道：阿羅漢の悟りの境地。もはや修行するものが何一つ残っていない位。

歓喜などと十地について…

Wiki-dharma より

歓喜等の十地

旧訳の『華厳経』巻23以下、新訳の『華厳経』巻34以下、『仁王般若経』巻上、『合部金光明経』巻3などに説かれ、菩薩が修行の過程に経なければならない五二位中の第41から第50までの位である。菩薩はこの位に登るとき初めて無漏智を生じて仏性を見、聖者となって仏智をそだてたもつと共に、あまねく衆生をまもりそだてるから、この位を地位、十聖といい、地位にある菩薩を地上の菩薩、初地（初歓喜地）に登った菩薩を**登地の菩薩**、それ以前の菩薩を**地前の菩薩**、十住・十行・十廻向を地前の三十心という〈cf.菩薩の階位〉。

十住毘婆沙論

なお『十住毘婆沙論』では、「地」を住処の意にとって、十地のことを十住と訳す。十地の名称を新訳の『華厳経』巻34によって挙げると（括弧内はサンスクリット及び異訳）

1. 歓喜地（pramuditā-bhūmi）極喜地、喜地、悦予地
2. 離垢地（vimalā-bhūmi）無垢地、浄地
3. 発光地（prabhākarī-bhūmi）明地、有光地、興光地
4. 焔慧地（arcismatī-bhūmi）焔地、増曜地、暉曜地
5. 難勝地（sudurjayā-bhūmi）極難勝地
6. 現前地（abhimukhī-bhūmi）現在地、目見地、目前地
7. 遠行地（dūraṃgamā-bhūmi）深行地、深入地、深遠地、玄妙地
8. 不動地（acalā-bhūmi）
9. 善慧地（sādhumatī-bhūmi）善哉意地、善根地
10. 法雲地（dharmameghā-bhūmi）法雨地

〔語句について〕　　（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

無漏智：煩悩のけがれのない智慧。仏の智慧。

登地の菩薩

登地菩薩：十地の初地にのぼった菩薩。歓喜地（かんぎじ）の菩薩。

地前の菩薩

地前菩薩：十地以前の位にある菩薩。

歓喜地：十地の初地。長い修行の末、菩薩が初めて聖者の列にはいる階位で、聖者になった喜びにつつまれる位。

離垢地（りくじ）：菩薩の修行階位である十地の第二。中道無相の理に住し、汚れのなかに入っても汚れを離れた位。

発光地（ほっこうじ）：菩薩の五十二位のうち、十地の第三。智慧の光があらわれる位。

焔慧地（えんねじ）：菩薩の修行階位である十地の第四。煩悩を焼きつくす智慧によって悟りへのたすけをうる境地。

難勝地：菩薩の修行階位である十地の第五。煩悩を断じた悟りの智慧をもって自在に救いがたいものを救う位。

現前地：菩薩の修行階位である十地の第六。縁起のすがたが明らかになり、勝れた智慧を引き出す段階。

遠行地（おんぎょうじ）：菩薩の十地の第七。無相の行に住して、世間と二乗の有相をこえた位。ただし、この地には、求める菩薩も救う衆生もないとして、無相の理沈んで、修行不能におちるおそれがあるとされる。

不動地（ふどうじ）

：菩薩の十地の第八位。無相を観じてあらゆるとらわれを去り、自然に真実のはたらきがなされる境地。

善慧地（ぜんねじ）：十地の第九。菩薩が無量の智慧をもって真如を体得し、すぐれたはたらきをおこす境界。

法雲地：菩薩の修行階位である十地のうちの最高の第十地をいう。雲が空を覆って雨を降らすように、教えを説いて真理の雨を降らせる無量の功徳を具えた位。

行境十佛（ぎょうきょうのじゅうぶつ）…華厳宗で菩薩が修行を成就して得たところの仏身を十方面から説いたもの。解境十仏の対。(1)正覚を成就し、世間に安住して涅槃・生死に執着しない無著仏、または正覚仏。　（佛教語大辞典　中村　元著）

『三十七の菩薩行』より

止依をそなえたすぐれた観察で　煩悩すべてを砕破するを知り
四無色定を正しく超越し　禅定修する仏子菩薩行（29）
つまるところはいつでもどこにても　いまこのときに心はいかなるか
尋ねていつでも念知を身に備え　利他成就する仏子菩薩行(36)
かくして精進成就の諸功徳を　無辺の衆生の苦患を除くため
三輪清浄般若の智慧により　正覚廻向が仏子菩薩行(37)

（本文）

⑮神通を具えたものは、**大王**と似ている。〔すなわち〕障礙が無いので、利他を成就したのです。
⑯福徳と智慧を具えたものは、**蔵**と似ている。〔すなわち〕多くの資糧の蔵になっているのです。
⑰菩提分法を（V111）具えたものは、**大道**と似ている。〔すなわち〕聖者すべてが行かれて、続いて行かれるからです。
⑱悲と勝観を具えたものは、**乗り物**と似ている。〔すなわち〕輪廻・涅槃のどちらにも堕ちないで、容易に行くのです。
⑲陀羅尼（総持）と弁才を具えたものは、**泉の水**と似ている。〔すなわち〕聞いたのと聞いていないのとの法を受持するので、尽きないのです。

そのように五つは、菩薩の〔殊勝な〕勝進道により包摂されています。

菩提分法：悟りの境地を達成するための三十七種の実践(三十七道品)のうちの七菩提分(梵 bodhyanga の訳)のこと。

陀羅尼：①《梵 dharani の音写。総持、能持と訳する》すべてのことを心に記憶して忘れない力、または修行者を守護する力のある章句をいい、特に密教では一般に長文の梵語を訳さないで、原語のまま音写されたものをいう。これの短いものを真言、一字・二字などのものを種子（しゅじ）という。

弁才：ものごとをよく理解する能力、または表現の能力。

勝進道：煩悩を断じて真理を悟る過程を四種に分けた四道の第四。真理を悟って解脱を得た上で、さらにすぐれた解脱の完成へと進む過程。

（例文仏教語大辞典　石田瑞麿著より）

（本文）

⑳法の園林を具えたものは、**歓声**が聞こえたのと似ている。〔すなわち〕解脱を欲する教化対象者に快く轟くのです。

㉑ただ一つの往く道を具えたものは、**河の流れ**と似ている。〔すなわち〕利他（H51b）の為すべきことが損なわれないのです。

㉒法身を具えたものは、**雲**と似ている。〔すなわち〕都率天の住処に住するなど〔仏陀の変化身の行い〕を示すのを通じて、有情の利益の為されるべきことは、それに掛かっているのです。

　そのように三つは、仏陀の地により包摂されています。

そのようならば、二十二は初業者の地から始まって仏陀の地までにより包摂されています。

『法身普賢の誓願』

われは原初佛なれば
われの立てたる誓願で
三界輪廻の有情らが
自生の明知をよく識って
大智広がりゆくことを。

わが忘身は耐えるなく
百万不思議のありかたで
人に応じて教化せん。

わが悲心ある誓願で
三界輪廻の有情みな
六道の処を出ることを。

譬喩を通じた区別

	凡夫から仏の地の間に具えたもの	譬喩	内容	道・地	訳註２より『道灯論自註釈』		
1	意〕欲をもつ	地	白の一切法（V110）の所依の事物になる	資糧道	因の菩提心	誓願の心	因の時の心
2	思惟をもつもの	金	正覚まで変わらない				
3	増上意楽（勝れた思惟）	月	あらゆる善の法が増長することになる		道の菩提心	発趣の心	
4	加行を持ったもの	火	三つの一切智性を障礙する薪を燃やす	加行道			道の時の心
5	**施の波羅蜜**を具えたもの	倉庫	一切有情を満足させる	見道と修道			
6	**戒**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**宝の鉱脈**	功徳の宝の依処の事物になる				
7	**忍**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**大海**	あらゆる欲しないものごとが降りかかってきたことにより、動揺しない				
8	**精進**〔の波羅蜜〕を具えたもの	金剛	壊れないことにより堅固				
9	**静慮**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**山の王**	所縁の散乱により動じない				
10	**智恵**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**薬草**	煩悩障と処知障の病を止滅させる				
11	**方便**〔の波羅蜜〕を（H51a）具えた	**善友**	あらゆる状況において有情の利益を放棄しない				
12	**誓願**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**如意宝珠**	誓願したとおりの果が成就する				
13	**力**〔の波羅蜜〕を具えたもの	**太陽**	教化対象者を円熟させる				
14	**智慧の波羅蜜**〔を具えたもの〕	**法の歌声**	教化対象者に意欲させる法を説く				
15	神通を具えたもの	**大王**	障礙が無いので、利他を成就した	勝進道			
16	福徳と智慧を具えたもの	**蔵**	多くの資糧の蔵になっている				
17	菩提分法を（V111）具えたもの	**大道**	聖者すべてが行かれて、続いて行かれる				
18	悲と勝観を具えたもの	**乗り物**	輪廻・涅槃のどちらにも堕ちないで、容易に行く				
19	陀羅尼（総持）と弁才を具えたもの	泉の**水**	聞いたのと聞いていないのとの法を受持する				
20	法の園林を具えたもの	**歓声**	解脱を欲する教化対象者に快く轟く	仏陀の地	果の菩提心		果の時の心
21	ただ一つの往く道を具えたもの	**河の流れ**	利他の為すべきことが損なわれない				
22	法身を具えたもの	**雲**	都率天の住処に住するなど〔仏陀の変化身の行い〕を示すのを通じて、有情の利益の為されるべきことは、それに掛かっている				

＊註２より

『道灯論自註釈』にも引用されていて、

「そのうち、二つは因の菩提心、十七は道の菩提心、三つは果の菩提心です。〔あるいは〕二つは誓願の心、二十は発趣です。

異門でも、三つは因の時の心、十六は道の時の心、最後の三つは果の時の心です。それらの詳しい義はその『現観荘厳論』自体を見るべきです。」